

群 教 セ	G05 - 08
	令3.278集
	美術 - 中

自ら設定した主題に向かって 主体的に活動する生徒の育成

——自分の表したいことを言語化し、再認識する交流を通して——

特別研修員 小林 佐恵子

I 研究テーマ設定の理由

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説美術編の中で、「言語活動の充実を図るようにする」と挙げられている。また、令和3年度版群馬県学校教育の指針において、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る」ことが求められている。

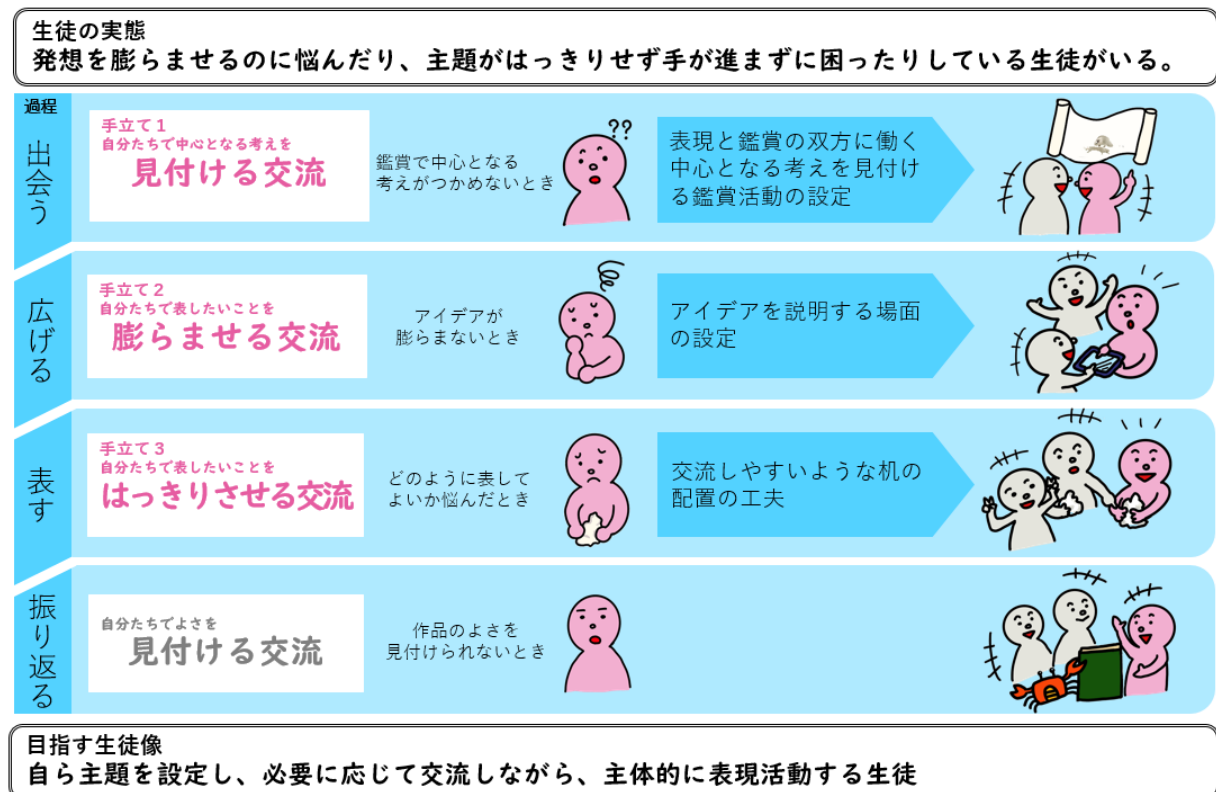
しかしながら、今までの授業においては、技法を教えることや作品制作を重視するあまり、このような視点で授業改善を行うことが少なかった。実際の授業においては、意欲的な生徒は多いが、発想を膨らませるのに悩み、なかなか制作が進まない生徒が見られる。生徒に聴いてみると、交流しながらアイデアについて話したり、相談したりしながら手を動かす方が作りやすいという意見を多く聞くことができた。必要に応じて、生徒同士の自然な交流があれば、発想を膨らませたり、工夫して制作したりする姿が見られるのではないかと考える。

そこで、授業の中で生徒が自分の表したいことを言語化し、交流によって自分の表したいことを再認識する活動を設定すれば、主題が明確化し、主体的に活動できるのではないかと考えた。

本研究では、生徒が交流を通して表したいことを明確化していくことにより、自ら設定した主題に向かって主体的に活動する生徒の育成につながると考え、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

主体的に活動する生徒の姿とは、自ら設定した主題に向かい、自分の課題を解決するために友達と交流し、表現する生徒の姿と考える。生徒が主体的に活動できるよう、友達との交流を通して自分の表したいことを言語化し、伝えようと思えることで表したいことを再認識できる交流活動が有効であると考え、以下三つの活動を手立てとした。

手立て1 自分たちで中心となる考えを見付ける交流

題材の導入で鑑賞を行い、鑑賞と表現活動の双方に働く中心となる考えを、交流により生徒の言葉で捉えさせる。そのことにより、教師主導ではなく、生徒が自分たちで作り上げているという気持ちになれる生徒主体の活動になると考えた。

手立て2 自分たちで表したいことを膨らませる交流

アイデアが思い浮かばないときや、膨らませたいときに、アイデアを説明したり、思いを伝え合ったりする話合いの場面を設定する。表現したいことが曖昧な場合、交流によって言語化することで自分の中で不明瞭な部分が明確化される。そして、交流を重ねることで表したいことを再認識することができ、自ら設定した主題に向かって主体的に活動できると考えた。

手立て3 自分たちで表したいことをはっきりさせる交流

表したいことをはっきりさせるために、交流しやすいよう環境を工夫する。机を向かい合わせにしたり、4人ずつのグループにしたりと交流しやすい環境を整えることで、制作中に生じた自分の課題を交流を通して解決し、表したいことを具体化できると考えた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 交流によって、友達の多様な思いや考え、アイデアなどに触れることで、新しい方法を試したり、つくり変えたりするなど新たな発想につなげている生徒が多く見られた。
- 交流をする際、友達との会話や質問に答える中で、自分の表したいことを言語化することで、自分の考えを整理し、表したいことを再認識することで、イメージが明確になり、主体的に取り組む生徒が見られた。
- 交流しやすいように机の配置を工夫することで、自然な交流をすることができた。表したいことを具体化するために、積極的に交流を行い、よりよいものになるよう取り組む生徒が多く見られた。

2 課題

- 交流が進まないグループに対して、生徒が、中心となる考えを意識しながら、自ら設定した主題に向かって活動できるよう、教師がファシリテーターとして適切に支援する必要がある。

実践例

1 題材名 「あつまれ！中学校フレンズー学校にいる見えない動物たちー」（第1学年・2学期）

2 本題材について

本題材は、学校にいる見えない動物たちを想像し、学校で起こる現象と動物たちの行動を結び付け、その動物の形や動きなどを粘土で表現する学習である。本題材は、学校で起こる現象と動物の特性を関連付けて想像する面白さがある。また、粘土で表現した動物を直接置くことでありえないことが実現するような面白さがある。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	<p>ア 形や色彩、粘土の性質、それらが感情にもたらす効果を理解し、自分の表現したい感じをもって工夫しながら表す。粘土や絵の具の効果的な生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表す。 (知識及び技能)</p> <p>イ 日常生活、身の回りの対象や事象を深く見詰め、目に見えない動物が起こしたであろう現象などを想像して主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、構成を工夫する。また、造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて、見方や感じ方を広げる。 (思考力、判断力、表現力等)</p> <p>ウ 楽しく想像したことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組み、作品などの鑑賞活動に取り組む。 (学びに向かう力、人間性等)</p>	
評価 規 準	<p>(1)・形や色彩、粘土の性質、それらが感情にもたらす効果を理解している。(知識) ・常に自分の表現したい感じをもって工夫しながら表し、粘土や絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。(技能)</p> <p>(2)・鑑賞から造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて、見方や感じ方を広げている。(思・判・表) ・学校などの日常生活、身の回りの対象や事象を深く見詰め、目に見えない動物が起こしたであろう現象など、想像したことを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。(思・判・表)</p> <p>(3)・美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく想像したことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。(主体態) ・美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく想像しことや美しさを感じ取り、作者の表現の意図と工夫などについて考えるなど鑑賞活動に取り組もうとしている。(主体態)</p>	
過程	時間	主な学習活動
出会う	第1時	・比較鑑賞から題材のめあてをつかみ、動物がいそうな場所の写真を撮影してイメージを膨らませる。
試す 広げる 表す	第2時	・前時の写真をもとに、アイデアを膨らませ、場所と動物の関係を考え友達と交流しながら主題を決定し、アイデアスケッチを完成させる。
	第3・4時	・粘土を触り、つくり、交流しながら広がったイメージを形にしていく。
	第5時	・形や色彩、質感の特徴を捉え、ポスターカラーで彩色する。
振り返る	第6時	・動物が出現する場所に作品を置き、鑑賞する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全6時間計画の第2時に当たる。生徒が自ら設定した主題に向かって主体的に取り組めるよう次のような手立てを具体化した。

手立て1 自分たちで中心となる考えを見付ける交流

「百鬼夜行」「おもちゃが動き出すアニメーション」の比較鑑賞を行い、本題材で制作の中心となる考え「存在しないものを想像して表す楽しさ」に気付かせ、学校で起こる現象と動物の動きや特徴を結び付け題材を通したためあてとして意識付けする。

手立て2 自分たちで表したいことを膨らませる交流

友達同士で交流しながらアイデアのもととなる写真を撮ったり、撮影した写真についてグループで話し合ったりして、思いを言語化させることで、アイデアを膨らませたり、新たな発見に出会えるようにする。

手立て3 自分たちで表したいことをはっきりさせる交流

生徒が作りながら、思いを伝え、交流しながら作品を形にできるよう、机を向かい合わせにしたり、4人グループにしたりと交流しやすいような場の設定や机の配置を工夫する。

4 授業の実際

【第1時】

手立て1 自分たちで中心となる考えを見付ける交流

導入では、「百鬼夜行」「おもちゃが動き出すアニメーション」を比較鑑賞し、共通点や作品の面白さなどを考えた(図1)。比較鑑賞させることで、「存在しないものを想像して表す楽しさ」という題材の中心となる考えを、交流を通して生徒の言葉で考えることができた(図2)。

次に「自分たちの生活している中学校にも存在しないものが存在したとしたら」という参考作品を紹介し、「いつも扉が開いているのは、もしかしたら動物が開けているのかもしれない」というように場所と動物の関係を考えさせ、参考作品の鑑賞を行った(図3)。生徒は校内という身近な場所なので興味をもっている様子であった。

鑑賞と表現活動の双方に働く中心となる考えを生徒から引き出すことは、自分の力でしっかりと表現活動の方向性を掴むうえで有効であった。

手立て2 自分たちで表したいことを膨らませる交流

題材の写真を撮る場面では、「どんな場所に動物がいるだろうか」「特徴のある場所はないか」と友達と交流しながら ICT端末で写真を撮る姿が見られた(図4)。

一人だけでは、ただ気になる場所を撮るだけで終わってしまう生徒もいるが、友達と交流することで一人では気付かなかったことに気付いたり、想像していることを友達に話したりすることでイメージを膨らませることができたのではないかと考える。

【第2時】

手立て2 自分たちで表したいことを膨らませる交流

前時に撮影した写真を友達に紹介し、イメージを膨らませるグループ活動を行った(図5)。写真を紹介する際、聞いている生徒は気になったことを質問するように指導をした。イメージをもっている生徒は、よりイメージを膨らませたり、明確化させたりしていた。また、なかなか紹介できない生徒に関しては、質問されることで思いを言語化しイメージの糸口を見付けたり、アイデアを友達と共に膨らませたりすることができた。

2つの作品の共通点はなんですか??

想像の中で作られている。現実には、無い物を巻物やアニメを通じて表現している。

図1 生徒の鑑賞の記述



図2 鑑賞の交流の様子



図3 鑑賞参考作品



図4 膨らませる交流



図5 膨らませる交流

アイデアが膨らまない生徒は、友達との会話や質問に答える中で、自分の考えを整理することで、表したいことを明確化させることができたことから交流活動は有効であったと言える(表6)。

S2： 何でこの写真を撮ったの？
 S1： 本が一カ所だけ出ていたのが気になった。
 S2： 確かに気になるね。
 S3： 何がいると思ったの？
 S1： まだ悩んでいる。
 S2： 本を引き出していそうな動物は？
 S3： いたずら好きの猿とかいそう。
 S1： 猿よりハサミで本を挟んでいるカニもよい。

表6 抽出生徒(S1)の交流の様子

手立て3 自分たちで表したいことをはっきりさせる交流

アイデアスケッチの場面では、交流しやすいように机をグループ(図7)にし、場の工夫をした。表現したいイメージに近付けるように分からないことを友達に質問し、生徒間で解決しようとする姿が見られた。振り返りでも友達と交流することでアイデアがまとまり、新たな表現に気付いた生徒もいた(図8)。

生徒が交流しやすい場を整えることで自然と交流することができた。必要なときに必要な交流を自発的に行えることは、自ら考えた主題に向かって表したいことを明確にする上で有効であった。

【第3～5時】

手立て3 自分たちで表したいことをはっきりさせる交流

アイデアスケッチの平面から粘土の立体にすることを意識させて、動物がいる場所との関わりも考えさせた。生徒間で交流をして粘土を触りながら、つくるイメージを明確にするために、机を4人グループにし交流しやすい場を整えた。生徒は作りながら「カニを踏ん張っているようにするにはどうすればよい?」「こうするとよいよ」など、作りながらイメージを形にしようと積極的に交流していた(図9)。また、粘土に彩色する時間も常に作品を見合い、交流できるように継続して机の配置を工夫した。

【第6時】

仕上がった作品を出現する場所に置き、友達作品を見付けに行く鑑賞活動を行った(図10)。見付けた作品は、ICT端末で撮影し、グループで作品の面白いところや工夫しているところなどを交流し、交流によって一人では気付けないよさを見付けることができた。

5 考察

鑑賞と表現活動の双方に働く中心となる考えを生徒自身で見付ける鑑賞活動を導入で行うことにより、作品制作の大きな方向性を自分でしっかりと意識することができ、ゴールをイメージしながら制作を行うことができた。自分たちで表したいことを膨らませる交流では、アイデアが膨らまず、はっきりしない生徒も友達との会話や質問の「なぜ」「どうして」に答える中で、自分の考えを整理し、再認識したことで表したいことを明確化することができていた。また、表したいことを明確化できたことで、描けない、やらないといった生徒は一人もおらず、積極的に制作に取り組む生徒が増え、交流活動は有効であったと言える。

自分たちで表したいことをはっきりさせる交流では、机の配置を工夫することにより、手を動かしながら友達に分からないことを聞き、課題解決しようとするときに必要な交流を自発的に行うことができた。授業を通して、自然と交流できる場を設定することは、生徒の主体性を育む上で大切だと言える。

以上のような姿が多く見られたことは、自分の表したいことを言語化し、再認識する交流が自ら設定した主題に向かって主体的に活動する生徒の育成に有効であったと言える。

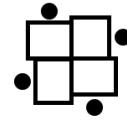


図7 机の配置

めあての振り返り
 【頑張ったこと・気づき・工夫したこと】
 どうやったらかこの写真に合う動物を考えられた。穴が空いてたけど最初は気付かなかった事がみんなのアイデアで気付けた。色々な表現ができた。

図8 生徒の振り返りの記述



図9 はっきりさせる交流



図10 生徒作品